

ヘンリー・ジェームズの 「未来のマドンナ」における アメリカの芸術家

藤 田 榮 一

芸術家としてのヘンリー・ジェームズ

ヘンリー・ジェームズはそれまでの大衆におもねる娯楽志向のイギリス小説を芸術にまで昇華し、定着させた最初の作家であると評価されている。彼はその生涯で膨大な数の作品を著述したが、その中で特に注目されるものとして自分自身を反映する芸術家の苦悶と精進を描いた作品を数多く残している。それらはジェームズの作家としての信念の吐露であり、成功した作家といえども、その内心には孤独と苦悶があることを披瀝した告白であるとみることができる。ジェームズはアメリカ人でありながらイギリスで作家活動を展開し、活躍したが、彼の真の姿はアメリカ人でもイギリス人でもなく国際人であった。彼は国籍を超越した孤高で偉大な存在であった。その彼にとって芸術家としての信念だけが、その生涯を貫く強固な存在の根拠となるものであった。

彼にとって芸術家であることだけが唯一の生きがいであり、芸術家であることで無ければ彼の人生の意義はなかった。彼は芸術を志向していたが社会的にも成功し、名を挙げ、死を直前にしてイギリスに帰化しイギリス人となった。その彼の功績をたたえイギリス政府はイギリスの最高の知識人や芸術家だけに与えられるオーダー・オブ・メリット（日本の文化勲章に類似する）を授け国家的評価を下したのである。それにもかかわらず彼は芸術家としての自己の存

ヘンリー・ジェームズの「未来のマドンナ」におけるアメリカの芸術家

在に手放しで満足し、それに安住していたわけではなかった。彼には永遠の彼方にまで続く芸術へのひたすらな精励の道が、その死の床にあってもまだ続いていたといってもよいだろう。まことに芸術のために生き、芸術のために活動し、さらなる芸術的達成を目指しながら死んでいったというのがジェームズの真の姿である。彼はアメリカからヨーロッパに渡り、ドイツ、イタリア、フランスなどを遍歴し、イギリスに渡って本格的な芸術活動を展開したが、アメリカを離れた理由になっていたアメリカの芸術家の苦悩を小説という芸術形式によって吐露し、披瀝した傑作が、その作家活動の中期に著述したアメリカの芸術家の悲劇を描く作品である「未来のマドンナ」(1873年)である。この作品にはジェームズ自身が痛感したアメリカの芸術家を取りまく苦悩と境遇の悲劇がきわめて明確に呈示されている。それはアメリカ出身の芸術家としてのジェームズ自身の姿を反映し、また重視するジェームズを知るうえできわめて重要であり、また意義ある作品であるといえる。

『未来のマドンナ』とはどんな作品か

この作品は芸術に対し真摯な興味と関心をもつ富裕なアメリカの青年がイタリア・ルネッサンスにあって、レオナルド・ダヴィンチ、ミケランジェロ、ラファエロなどの芸術的天才を輩出したイタリア屈指の芸術の都であるフィレンツェに滞在中、1人のアメリカ人画家の芸術への情熱にほだされて交際しているうちに、彼が偉大な傑作の創造を目指して精進していることを打ち明けられ、その完成のために彼を激励したところ、彼が急に姿を見せなくなったので、彼の住家をきき出して訪問した。ところが彼は傑作の構想を練り、絵を描こうとしているうちに疲労困憊し、病を得てあっけなく死んでしまう。彼は悲劇的な芸術家であるが、彼と対比させて金儲けのために土産物の人形を芸術と称する似^え非人形師への軽蔑を感じる青年が芸術への情熱とその真髄を理解しようとする経験を語り、ジェームズ自身の芸術観を語るという内容になっている。さらに詳しくみると、この作品はフィレンツェで数人の紳士淑女が談話してい

たときに、芸術家であって生涯にただひとつの傑作しか残さなかった人物がいるという話を聞いていたH氏と言われる紳士が一生に一度の傑作を描こうとしながら、それもできなかった画家の話を語った。彼がある夕暮れメジチ家の宮殿とその隣にあるウッフィ美術館のあるフィレンチェの中心の広場にたたずんでミケランジェロのダビテの彫像を見ていると1人の男が近づいてきてフィレンチェの芸術の偉大さについてとうとうと説明しはじめた。あまりの真摯な芸術への情熱に驚きながら彼の話をきいているうちに彼がアメリカ人であることを知ると、その男は自分もアメリカの芸術家だと名乗ってアメリカ人はヨーロッパと異り、その芸術的風土の乏しさのために不遇であり、芸術不毛の重荷を背負って芸術の達成のために邁進しなければならない宿命を担っていると嘆きの言葉を発する。

「われわれは芸術から廃嫡された民です！ われわれは深い心性に到達し得ないことになっている。芸術という蓮の^{うてな}台から締め出されているのですよ。アメリカ人の感性が根を下ろすべき土壌は、何と猫の額ほどの不毛な埋立地だ！ ええ、われわれは生まれつきの^{かたわ}不具です。アメリカ人にして卓越するためには、ヨーロッパ人の10倍もものを学ばなければなりません。われわれには精妙な感覚が欠けています。洗練された趣味も、明敏な賢察の才も、創造の源泉となる靈感も備わっていない。どうしてそれらを望みうるのでしょうか。粗野でざらざらするだけの風土、語るべき何ものも持たぬ過去、耳を聳るばかりの現在、周囲にひたひたと押し寄せるぎすぎすした文明の圧力、こういったものなかに芸術家を育み、励まし、燃えさせる何ものも存在しないのは、そう言いながらこの悲しい心に何ら痛惜の念も生じないのと同じだ！ 私たち哀れにも志を抱くものは、永遠の流浪のなかに生きなければならんです。」

男は数十年も前からフィレンチェの芸術的雰囲気と風土に浸って傑作を創造しようと貧困に耐えて構想を練り、傑作の完成のために精励を尽してきたと語

ヘンリー・ジェイムズの「未来のマドンナ」におけるアメリカの芸術家

った。彼は自分の尊敬するラファエロの「座の聖母」を称讃し、自分にも、その傑作の聖母にもなり得る現実のモデルが居ることを告白する。彼の、夜は堂々たる芸術家らしい姿も、その後昼の光で見るとみすばらしく老いつつある哀れな姿を呈している。青年は是非そのモデルに会わせて欲しいと頼み彼が讚美するモデルの部屋を訪ねる。乏しい光の部屋で、その女性を一見すると色白で豊満な美しい淑女で画家が讚美する聖母マリアのモデルにふさわしい姿に見えるが、よく見るともう中年を過ぎた肥り気味で皮膚はたるみ、とうてい聖女の清らかさは失われていた。思い切って青年は画家にその事実を指摘すると彼は想像力こそが創作の源泉で、現実には芸術家がそれを理想化することによって傑作が完成されるのだと反論する。しかし青年が早く傑作を完成して下さいと激励すると画家は、モデルの真実の姿の暴露にショックを受けながらも、今から直ちに何十年と構想を練ってきた傑作を完成させることを約束する。ところが何週間たっても一向に彼から音沙汰がないことを不思議に思った青年がモデルの住家を訪れてみると彼女はみるからに卑しい金儲主義の芸術家気取りの人形師と食事をし、彼の愛人で金銭的支援を受けているような雰囲気なかで画家の住所を明らかにしてくれる。

彼女の相手の人形師は猫と猿をモデルにし観光客に芸術的記念品だと称して売りつける芸術家の魂もない卑しい人物である。モデルは自分は聖処女でも何でもないのに画家が勝手に自分を理想の女性にまつりあげ、訪ね続けるので、それを拒む必要もなかったため、彼の訪問や礼讃を受け入れてきただけだと告白する。青年は画家のことが気にかかり彼の住家を訪れた。すると画家は何十年も絵が描かれていないひからびたキャンバスの前で疲労困憊して息たえだえの状態に陥っていた。彼は何十年も1枚の絵も完成せず、構想だけを練ってきたのである。彼は自分の現実と理想のギャップに打ちのめされ、悲嘆のうちに病で瀕死の状況にあった。青年は医者を呼んでその回復に力を尽すが、その甲斐もなく画家は1枚の絵も残さず、この世を去ってしまう。

1週間後共同墓地に彼を葬った青年はモデルが黒いショールを頭からかぶり

姿をあらわした女から、画家が死に際して「苦しみましたか？」ときかれたのに対し「苦しみはひどかったが、短くてすみしました」と彼女を慰める。彼女は画家が自分のみすばらしい部屋に天国を見出し、芸術への情熱をたぎらせていたことを尊敬こそすれ、彼に自分の実態を知らせて彼を幻滅させることなど少しも考えていなかった。それどころか自分を聖女のようにあがめ、無言で1時間も自分を注視し、芸術とか、自然とか、美とか、義務とか、自分の理解をこえた高尚なことを話してあくことがない画家を清らかな聖者のような人だと言った。そこには芸術の創造に自分の存在の範囲で協力する良き芸術の理解者の姿があるだけで、彼女には何の悪意もない。

彼女は「あの人はすばらしい天才でしたわ」と心から彼を称讃する。これに対し、この作品の最後に書かれた「猫と猿——猿と猫——人生なんてその組み合わせに過ぎませんよ！」という世俗的な金儲け主義の人形師の異質性は、真の芸術家の不遇と似非芸術家が跋扈^{ばつこ}し、繁栄する現実世界の矛盾をジェイムズが非難していることを示している。この作品はアメリカ人であるが故に不遇で芸術に専念し、人生を楽しむことを放棄する真摯な芸術家の悲劇を物語るものである。同時にそれはジェイムズのアメリカの芸術家としての苦悩を小説という形式を借りて表現した注目に価するもので、その芸術的価値は高い。ジェイムズ自身もニューヨーク版の序文で、この作品は自伝的要素の強いことを明らかにしている。

今「情熱の巡礼」と「未来のマドンナ」を読み返してみると、それらの作品はこの上もなく過去の記録といった性格を帯びてくるのである——それらのものが他の人々にとって今日有しているかもしれない興味を測定することは一応別個の問題として。とはいっても、それらの作品から私が引き出すのは唯一つのことである。つまり、それはそれらの作品が慰めという役割を果たしているということである。比較的貧困な状況にあって、失われたヴィジョンを稚拙ではあるが強烈な芸によって自分のものにできた、深い喜びが——どんなにぎ

ヘンリー・ジェイムズの「未来のマドンナ」におけるアメリカの芸術家

ごちなく、また困難をとまなうとしても、必要な時にそれらの作品が果たしている役割が——それらの作品から顔を突き出していて、その結果他のすべてのものが排除されて、私の記憶にはそれらのものがこの上もなく神聖なものとなっていることを私は何のこだわりもなく認めたいのである。⁽¹⁾

このようにジェイムズ自身が自作の決定版としてのニューヨーク版に収録し、その序文を書いているところにも彼がこの作品を自己の芸術家としての信念の投影として高く評価していることが分る。彼の芸術家を描いた作品には悲劇的なものが多い。これは彼自身がアメリカを去り、ヨーロッパに渡って創作活動を続けたことから解るようにアメリカに芸術家を育む芸術的風土が乏しかったことが、その原因であった。彼は幼少の頃からロンドン、パリ、ローマなどのヨーロッパ各地を父や家族とともに遍歴し、スイスのチューリッヒでは学校教育も受け、ヨーロッパ文化とアメリカ文化の格差と異質性をいやというほど実感させられてきたから彼がヨーロッパに渡ったのも当然である。彼は先輩作家としてホーソンを尊敬していたが、そのホーソンについての批評のなかでアメリカの芸術的風土の乏しさを指摘している。ジェイムズの『ホーソン論』は1879年にロンドンで出版されているので「未来のマドンナ」が1873年に執筆されていることを勘案するとホーソンと自分の共通点としてアメリカの芸術家としての宿命ともいえる芸術的風土の乏しさを強調したいという強い意識があったことが確認できる。『ホーソン』ではそれをこう述べている。⁽²⁾

わたし自身について言えば、わたしが彼の日誌のページをめくるにつれて、彼が住んでいた未開で単純な社会の姿が目に見えるような感じを受ける。わた

(1) Henry James: *The Art of the Novel* ed. by R. P. Blackmur (New York, 1962) p. 196. ヘンリー・ジェイムズ著『ニューヨーク版』序文集 多田敏男訳 (関西大学出版部, 平成2年) 213-214頁。

(2) Henry James: *Nathaniel Hawthorne* (London, 1987). ヘンリー・ジェイムズ著『ホーソン研究』小山敏三郎訳 (南雲堂, 1964年) 48-49頁。

しが未開とか単純とかいう形容詞を用いるのは、反感をそそるためではなく、叙述のためである。ホーソーンの立場にできるだけ接近しようと思えば、彼の環境を再現するよう努力すべきである。われわれはそこに実にもろもろの要素が欠けているという感じを受ける。そして、わたしの形容詞をくりかえせば、冷やかで、稀薄で、空白な、といったものがあまりにもはっきりとあらわれているため、われわれの第一印象は、そうした世界において主題を探し求めるロマンス作家にたいする同情の念である。そうした主題のためには、ホーソーンがもっと濃密で豊かで暖かいヨーロッパの光景に接した後年になって、彼がきつと感じたように、実にいろいろなものが必要なのである——小説家が豊富な連想をまとめあげるには、歴史や慣習の非常な蓄積、風習や典型の非常な複雑さが必要である。もしホーソーンが同じ程度の天才、同じ性向、同じ習慣をもった若いイギリス人であったならば、彼をとりまく世界にたいする彼の意識は非常に違ったものとなっていたであろう。いかほど目立たず、いかほど控え目であったにせよ、彼自身の個人生活、彼の同胞の生活に関する彼の印象は、ほとんど無限に、それだけいつそう多種多様であったろう。その思索の散策と空想の中で、ホーソーンが見晴らしえた光景の否定面は、ちょっとした技巧で、ほとんどこっけいに見せることもできるほどだ。他国にはあってアメリカの生活構造には欠けている高度の文明の諸項目のないないづくしをすることもできよう。奇跡でもなければ数え残しはあるまい。ヨーロッパ的意味の国家もないし、実際、特別な国家の名称もないようなものである。君主もいない、宮廷もない、個人の忠誠もない、貴族制度もない、国教会もない、国教会聖職者もない、軍隊もない、外交機関もない、宮殿もない、城郭もない、荘園もない、古めかしい田舎の本邸もなく、牧師館もなく、葺ぶきの田舎家もなく、つたのはった廃虚もない。大寺院もなく、僧院もなく、また小さなノルマンの教会もない。大きな大学もなく、パブリック・スクール（寄宿制の私立中等学校）もない——オックスフォード（Oxford. 12世紀に創立されたイギリス最古の大学の1つ）もイートン（Eton. 1440年ヘンリー6世が創立したパブリック・スクール）もハロー（Harrow. エリザベス1世時代に創立されたイートンと並ぶパブリック・スクール）もない。文学もなく、小説もなく、

ヘンリー・ジェームズの「未来のマドンナ」におけるアメリカの芸術家

博物館もなく、絵画もなく、政界もなく、遊獵階級もない——エプサム（Epsom. イングランド、サリー州の都市、近郊にグ）もなく、アスコット（Ascot. イングランド、パークシャービーで有名な大競馬場がある）の競馬場、もっとも貴族的な集りとして）もない！ アメリカの生活に欠けているこうした一覧表が何か作成できる——ことに、40年前のアメリカの生活においてはそうである。こうしたアメリカの生活が想像力に与える影響は、それがイギリス人またはフランス人の場合だとしたら、一般的に言って、けだしはなはだしいものがあるろう。ひどいときえ言えるこうした非難を浴びせたくて、当然言えることは、以上列挙したものが欠けていれば、何も無いに等しいということだ。

「未来のマドンナ」の不遇な画家が嘆く悲嘆の言葉はジェームズ自身のものに他ならない。このジェームズの芸術的意識について彼の友人や知人への手紙のうちの重要なものをまとめて編集し、ジェームズの作品やジェームズの作家としての評価について数々の批評をし、彼の芸術家としての本質を洞察しようとしたパーシー・ラボックは、その論文「芸術家の魂」において、ジェームズの死後まだあまり時間が経っていない1920年に早くもジェームズの芸術への専心⁽³⁾についてこのように述べている。

ジェームズは自分の確信が多少とも挫折するということを全く認識していなかった。彼は自分の全重量を自分で支え、いさきかもゆるぐことのない信念にかけていた。その信念とは芸術の命の神聖さと十分な豊かさがあるということであった。何の理由づけも必要とせず、何の疑問もなく、それはジェームズが受け入れている確信であった。想像力のはたらきは最高のものであり、名誉であり、想像できる仕事であり、空虚なものから実人生を想像する以外の何物でもないということは彼にとっては絶対的なものであった。彼は芸術によってでなければ認識したり評価することができる人生などあり得ないと主張すること

(3) Percy Lubbock: 'The Mind of an Artist' in *The Question of Henry James*, ed. by F. W. Dupee (New York, 1973) p. 56.

に何のためらいもなかった。

このような芸術への情熱的確信は、ジェイムズにとっては人生とは芸術の創造以外には何の意義もなかったという明白な事実である。「未来のマドンナ」の不遇な三流画家は不幸にも一生かかっても自分の理想とする傑作を物にすることができなかったが、彼と対蹠的にジェイムズは天才と評価される稀有の資質と余裕のある経済的基盤の上に立って、自分の理想とする審美的な作品を着実に創造し続け、その作品の質も量も偉大な作家と評価されることにふさわしいものであった。彼は世界で偉大な作家ではあるが最も偉大な作家ではなかったという批評家もあり、ブラックマーのように彼を偉大な作家であると称讃している批評家でも、そのような批評家は存在したが、ジェイムズにしか創造できない貴重な傑作も彼は多数にわたって創造することができた。

しかし彼が認識する芸術家の本質は「未来のマドンナ」の貧乏画家と共通している。それは真に芸術を真剣に志向する芸術家に共通するもので、パーシー・ラボックも「それにもかかわらずジェイムズが全てのなかで最も気にかけてものは彼にとって人生の中心であり本質として最後まで自分の人生は孤独である⁽⁴⁾ということ⁽⁴⁾を彼が熟知していた」ということであると芸術家の人生の孤独であるという認識であった。

不遇なフィレンチェの画家と同じようにジェイムズは芸術家として成功していても、その本質にあるものは芸術以外に何もなく、家族も苦しみを共感してくれる愛人もなく全くの孤独の世界で芸術だけに専念し、その生涯の最後まで、それを貫ぬきとおして生きたという事実である。彼は明らかに人生の至福をすて芸術の神にその身も心も捧げつくしたということである。このような真摯な芸術家は世俗的で物質的な欲望や金儲けのような拜金主義に身をゆだねることはない。ジェイムズが「未来のマドンナ」は記録であるというとき、その記録

(4) op. cit., p. 68.

ヘンリー・ジェイムズの「未来のマドンナ」におけるアメリカの芸術家

とは真剣で誠実に芸術に専念する芸術家としての自分自身の芸術家としての精神とその姿の記録であるということである。

「未来のマドンナ」の貧乏で不遇な画家がモデルに対して何十年も傑作を創造するための土台として芸術家としての無私の魂で対応する姿、たとえその女性がその実態が卑俗な女性であっても、自分の想像力と芸術家としての情熱で、それを神聖なものに昇華して芸術を創造しようとする態度、芸術へのひたすらな専念、金儲け主義の俗物的な人形師の世俗的な存在などは全く無視し、ただ傑作の創造のための構想と準備に心を砕く態度はその本質において芸術家としてのジェイムズの姿と共通するものである。不遇な画家は自分の才能の欠如と貧困の苦難を認識しながら、それでもなお芸術に精励しようとする芸術家の魂をもっていて、それは、この作品のいたるところで具体的に力強く呈示されている。彼は貧乏であっても観光客を相手に手軽に似顔絵を描いたり、名所旧跡の風景画を売りつけたりして傑作の創造のために手軽に資金を調達することもない。

彼の目標はただ芸術への専念であり、傑作の創造である。そのため彼の長年着古したみすぼらしい服装、朽ち果てそうになるほど老い果てた外観と対蹠的に、その芸術への取組みと気概は、まさに本物の大芸術家と比較しても全く遜色がないといえる。彼はアメリカ青年を案内し、フィレンチェの美術館の中でも最高の傑作をつぎつぎに見せて、何故それらが傑作であるかということを書家としての立場から詳しく説明する。彼の芸術への情熱は自分の絵でも「中途半端なもので自分を表わさないようにしているのです」と述べるように自己を厳しく抑制し、「悪いものは神にかけて焼却してきました」とその芸術の完成度の高さを真摯に求める芸術家の芸術への志向の潔癖さを示している。彼は経済的に恵まれず、衣服も着古し、朽ち果てそうになっても、それでも金銭を得るために「1枚の絵」も売らなかつたことを誇りにしている。彼は芸術についてはあくまでも理想を追求し、いささかの妥協も自分に許さなかつた。しかし人間は神ではないのだから、生活の糧を得ることができなければ理想だけに生

きることは不可能である。

ジェイムズは経済的に比較的恵まれていたが、この貧乏画家は人間生活の糧を無視して芸術のために自分の命を賭け、それをすり減らして傑作の完成を目指している。傑作が好運にも完成され巨匠として物質的にも金銭的に恵まれることが無ければ生活苦によって彼の生がつきることは明白である。ジェイムズも筆1本で生き抜いたが、もし小説家として成功できなければ彼と同じ運命をたどったかもしれないのだ。それが芸術家の姿を描く記録であるとジェイムズが述懐する所以である。貧乏画家の芸術への情熱はそれほど真剣で、その限りにおいて文字通り命を賭けたものであった。彼は画廊を歩くときに批評的気分と理想的気分で、そこに飾られた数多くの絵を鑑賞してきたと言っている。彼によれば「批評的気分の方がのどかで、作品に対し好意的で、それだけ高处に立って厳しいことを言ったりしない、画家の趣味相応に理解できる」のに対し、「理念的気分のときは潔癖なまでに理想に憧れ、厳粛になり、俗受けしたものや小成に安んじたものは一切うとましく思われ、最上のもの、最上のもののなかでも最上のものしか見る気がなくなる」と青年に自分の心境を述べている。この言葉から解ることは彼は自分自身に対しては真摯な芸術家として理念的気分になり、その気分にもとづいて他人の絵を評価し、その厳しい自己評価を他人の絵を見るときにも、その尺度を適用する結果どんな絵を見ても、それほど満足できず、その反動として自分も絵が描けなくなるまで厳格に自己評価を下し、自己批判を続けてきたのである。

どんな画家にも構想を練り、デッサンを描き、下絵を作り、習作を書き、それを続けても、その絵が芸術として完成の域に達しないことがあり、そのような地道な努力を着実に積み重ね、驚異的ともいえる努力の結果として彼が称讃する「座の聖母」のような未来に残る傑作が完成される。それが画家の修業と努力と精進の結果としての成果である。彼が言う批評的気分の方は芸術家ではなく、芸術の創造に渾身の力をつくす者としてではなく、芸術を鑑賞し、それを楽しむ一般大衆の創造の苦しみから解放された者の鑑賞態度で、その両者の

ヘンリー・ジェイムズの「未来のマドンナ」におけるアメリカの芸術家

間に大きな溝があるのも当然である。ジェイムズは画家ではないが、同じ芸術家として芸術家の苦しみを体験し、それと一体化しているから、その画家の言葉を自らの記録として述べるのである。

ところがジェイムズとは異って、この画家は何十年もの間、高度の芸術の創造を志しながら傑作の完成を切望するだけで、構想を十分に練ることを怠り、デッサンを描くこともなく、下絵を描くこともなく、習作をつみ重ねるという準備の蓄積を放棄している。このような平凡とも思える努力の蓄積を怠り、それを無視し、高邁な芸術論だけを吐き続けてきた。その結果全く絵が書けなくなり、高度の芸術の創造という理想と自分の絵の才能の欠如というみじめな現実という両者の乖離が定着し、画家としての業績が何一つ残せないという悲劇的な結果をもたらすことになったのである。どんな偉大な芸術家といえども、失意や失敗の繰り返しの連続の末に自分が満足し、誇りにすることができる傑作を物にすることができる。この人間に課せられた平凡な営みの必要性という現実を彼が無視したところに彼の悲劇がはじまり、終末をむかえたのである。天才といえども人間離れのした苦難にみちた努力の末に超人的な天才としての業績が完成できるのである。これは絵という芸術に限らず、あらゆる芸術に通じる原則であり、学問の世界でも、宗教の世界でも同様のことが言えるだろう。天才的な資質をもった人間といえども不断の研鑽と努力を欠けば超人的な業績を達成することはできない。いわんや天才的資質に乏しい凡人は懸命に努力しても僅かの進歩と業績しか達成することができないのが普通である。この平凡な人間の生活原則の摂理を彼がなごりにしたところに彼の限界があったといえるのだ。

レオナルド・ダヴィンチもミケランジェロもラファエロも努力を惜しんで偶然に天才的ともいえる傑作を創造し、後世に残したわけではないのだ。キュリー夫人もコッホもダーウィンも天才的資質をもちながら苦難の努力の蓄積の結果として驚異的な業績を達成し、それを後世に残していることを否定することはできない。画家の芸術への情熱と専念は尊敬に価するものではあるが、彼は

理想の追求に走るあまり、自己の現実を無視した人間の現実の人生設計の不備があったことを認めざるを得ない。ジェイムズは成功した偉大な芸術家として天才的資質に恵まれた人間といえども天才的な業績を創造するためには苦難と失敗の蓄積の上に努力が必要であることを読者に示唆しているのである。彼の膨大な著作とその優れた作品と彼が続けた超人的な努力を跡づけてみれば、このことが明確に理解できる。

画家の悲劇は芸術家として現実に対する幻想という錯誤にあることが示唆されている。青年は彼が傑作として激賞する「座の聖母」と酷似する理想のモデルを見つけ出し、数十年間彼女をみつめて、それを写実し、それを想像力によってより偉大な理想像を創造し、傑作を完成しようと考えていた。たしかに彼女は、20年以前には画家の想像力と創造性を刺激し、彼女をモデルとして数え切れないほどのデッサンや下絵や習作を描き続けることによって、やがて傑作が完成されたかもしれない。しかし彼女は若い時はたしかに純粋で輝くような美貌と聖なる雰囲気を漂よわせていたのかもしれないが、生活のために似而芸術家の人形師から経済的支援を受け、日々の平凡な暮らしを営んで世俗的な欲求を満たすという人間的な現実を受入れなければならなかった。このため紹介され彼女を目にした語り手の青年が彼女をよく見ると今や清純なマドンナにしては通り過ぎ、色白で輝くような、かつての美貌も顔の肌もたるみ、世俗的な生活の垢が積って、清純で聖的な雰囲気を漂わせる宗教性を帯びているところはない。

ところが画家は、このモデルとして崇拝している女性が20年も経っているのに昔のままの聖なる女性であると信じ込むという大いなる幻想にとりつかれている。ここにも彼の画家としての鋭くなければならないモデルの選定についての悲劇的な過失が露呈されている。この幻想を青年に指摘され、真実を暴露された画家はあわてふためき、そのモデルが如何に美しく輝き清純であり、聖母さながらであるかということを強固に主張するが、彼女がもはや彼の理想とするモデルとはほど遠いことに気がつかざるを得ない。それでも最後の力をふり

ヘンリー・ジェイムズの「未来のマドンナ」におけるアメリカの芸術家

しばって芸術家としての想像力と能力を極限まではたらかせて彼女をモデルとした絵を、貧しく、うらぶれたアトリエで描こうとするが、もはや手遅れである。彼は寝食を放棄して努力を空転させ傑作を描こうとするが、芸術の理想のみが急走し、テッサンも下絵も習作も満足に描くことなく、構想だけを数十年間もあたためただけでは傑作は描けるものではない。彼は数十年間も1枚の絵も描いてこなかったのに、にわかに傑作が描ける筈はない。彼はアメリカの芸術家はヨーロッパの芸術家の3倍も努力をしなければならぬと認識し、芸術への情熱とアメリカの芸術家の不遇な宿命をかこちながら自分自身は3倍の努力どころか殆んどの努力を放棄している。

この現実には彼を芸術家として人間として失敗させる必然的な条件である。この結果、彼は自分の理想からのみじめな現実の乖離かいりを身にしみて痛感し、失意と自己否定の奈落につき落とされ、疲労困憊のあまり病に倒れ、再起不能となる。彼には傑作の完成とはほど遠い失意の中で、この世界を去ってゆくという道しか残されていない。彼の悲劇はたしかに痛ましいが、一種の必然の悲劇であることを自己の芸術への精励と比較しながらジェイムズは、読者に語っている。これが高い理想をいだいていても努力を惜しむ芸術家の資質を欠き、貧困にあえぐ芸術家の姿であり、その現実はいかなる芸術家も真の芸術を志向する限り避けて通ることができないものである。

ジェイムズは芸術至上主義の作家ではない。彼にとって芸術はあくまでも人生のための芸術であると考えていた。しかし、その信念の上立って大衆におもねる娯楽に徹した作品はあくまでも忌避し、芸術の本質を目指した作品こそ自分の作家としての活動の目標であると確信し、それを実行し、努力を続け、やがてその目標を達成した。彼がイギリスの伝統を受け継ぐ偉大な作家であると評価されているという事実にも、そのことは確証されている。

この作品において、画家が聖なるモデルと考えたかつての美女を訪れた青年が愛人らしい男と食事をともにしている状況にあつて、青年は即座に2人の関係を見抜いたが、内心の衝撃をかくして2人に礼儀正しく挨拶する。モデルと

されていた女性は青年の不意の訪問に自分たち2人の秘密を暴かれて混乱するが、青年の冷静な態度に、落ち着きを取りもどし、相手の男性を「この人も芸術家ですの」と紹介する。彼は芸術家を気取っているが、それは表面だけで、「猫と猿、猿と猫」をモデルにして観光客相手に記念品の人形を売りつける卑しい人形師である。彼にとっては芸術などはどうでもよく、その作品が大衆に人気があり、よく売れて、金儲けができればそれで十分だという人物で「猫と猿——猿と猫——人生なんてその組み合わせに過ぎませんよ!」と言ってはばからない人物である。

彼にとっては本物の芸術などというものは退屈なもので、諷刺、茶番、戯画のようなものは紙やペンや画筆だけの世界に限られていたが、それを彫刻にしたことが自慢で、そのモデルとする猫と猫はモデルとして十分であり、究極のところ人生は、そのような卑しい動物を組み合わせで大衆を面白がらせるだけでよいのであるというのである。彼によれば人間の営みを諷刺家の目で、その本質を見抜き、人間の卑俗性を売り物にしたところに自分の存在意義があると自負している。これは画家の真の芸術に情熱を傾けた姿勢とは全く反対のものである。青年はこの男をエテ公に過ぎないと思っている。これはジェイムズが、芸術を装いながら、大衆がよろこぶ俗受けのする作品を創作し、人気を博して満足している似而芸術家を厳しく非難していることに他ならない。画家は失敗した芸術家であるが、真の芸術家を志向して情熱を傾け芸術に人生の全てを捧げた。モデルが彼の葬りに参加し、青年に「あの人は天才でしたわ!」といい「あの人は聖者のような人でしたわ!」と述懐するのは、彼の芸術への専念を認めた率直な評価に他ならない。「未来のマドンナ」は悲劇的な芸術家の姿を描き、芸術家には悲劇的な人生しかないことを自覚し、芸術家としての人生を孤独に生き、自分が芸術に精励したことに満足してその生を終えるという芸術家の宿命をジェイムズが自己の記録だとしているのである。不幸にして失意のうちに、その生を燃焼させて人生を終えた画家に対するジェイムズの同情と哀悼の心がこの作品にはにじみ出ている。

ヘンリー・ジェームズの「未来のマドンナ」におけるアメリカの芸術家

ジェームズの芸術家としての認識についてスチューアート・シャーマンは『「ヘンリー・ジェームズの「審美的理想主義」⁽⁵⁾』と題する論文で、ジェームズは芸術至上主義の作家ではないが、ウォルター・ペイターと類似した芸術に最高の価値をおく芸術志向の芸術作家であり、「未来のマドンナ」については、その物語りの進展を注視する敏感な青年が詐欺的芸術家に徹する「猫と猿」の人形を作って、その組み合わせに人生の全てがあるとうそぶく人形師が真摯な芸術家である画家の貧困と苦難を嘲笑する姿に限りない軽蔑を感じる様子を指摘している。画家は失意のままに傑作を創造できないで亡くなるが、そこにアメリカの芸術家の悲劇と芸術へのジェームズの人生の取り組みが示されていると述べている。これは筆者のこれまで論じてきた本論の趣旨とほぼ類似したものであり、本論の解釈の妥当性を示している。

さらに、アメリカの優れた文学批評家として高い評価を受けている R. P. ブラックマーは、その論文「憂鬱な世界で」⁽⁶⁾において、ジェームズが描く芸術家は人生に失敗することしかない芸術だけが芸術において成功するのであり、それが理想の芸術家であるとし、芸術家としての完全な人間は人間としては不満足であると述べて、人生と芸術の両方において成功することは極めて困難であると指摘している。ブラックマーは芸術家の住む世界は憂鬱な世界であり、極めて孤独な世界で、自分以外には殆んど何もなく、宗教的隠遁のようなものによってしか得られるものでなく、生か死か、あるいは死の只中の生に近いものによってしか達成されないと述べている。これは芸術家の生が過酷で苦難な状況であることをジェームズが自認していたことを示している。

さらに芸術家の住む「憂鬱な世界の中で」は芸術家の見るものは、彼の作品の中に、その姿を消し去り、それが芸術家を描く唯一の姿は彼を失敗者として

(5) Stuart P. Sherman: 'The Aesthetic Idealism of Henry James' in *The Question of Henry James* p. 72.

(6) R. P. Blackmur: 'In The Country of the Blue', in *The Question of Henry James*, pp. 194-206.

描くことになる」と述べている。これがアメリカの芸術家が遭遇する過酷な芸術の世界であり、それ以外の世界では芸術家は単なる人間になってしまうのであると述べている。

ここに取り上げた文学批評家の見解はジェイムズの描く芸術家の姿とジェイムズ自身の芸術家としての誇りと自分に対する自戒と彼の矜持を示すものである。ここに示した見解に限らず、ジェイムズを芸術のみを志向する極めて崇高な芸術的な作家であるという評価が多くを占めている。アメリカの芸術家の不遇な宿命と、それを克服して超人的な努力を死の直前まで持続し続けた偉大な芸術家ジェイムズの姿がここに如実に示されている。